論文8

呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為（アイヌ編）

菅　豊

動物考古学 第3号

1994.10

動物考古学研究会

呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為(アイヌ編)

菅　豊

はじめに

サケ[1]を漁獲する地域において、それは特異な民俗的位相に存在し、それを取り巻く民俗事象は、他の魚類に比べ豊富で構造的である。多くの伝承的信仰、それに裏付けられた儀礼、口頭伝承をサケを捕る人々は育んできた。日本においても、東北日本海側に顕著に見られるサケの初漁を祝う初鮭儀礼や、サケの神話ともいえる「サケのオオスケ」譚は、サケの霊魂が此界と他界を去来する再生観、世界観を基盤として成立しているのであり(菅1990)、その儀礼複合体は修験道などの民間宗教によって、さらに複雑な宗教的な儀礼へと昇華されている(菅1994)。民俗学的な見地から眺むるに、サケは、人間が動物によっていかなる観念性を保有するかという問題に導いてくれる指標動物であり、サケを捕る人びとの自然観を垣間見せてくれる重要な対象なのである。

そのようなサケを取り巻く民俗事象の重要なものの一つに、魚叩棒がある。

魚叩棒は一般にたたき棒、打頭棒、魚殺棒、なづち棒等の名称で知られる木製主体の製品で、サケの捕獲後その頭を叩き、絶命させる時に使用する漁具である。使用目的が撲殺という単純明解なところに置かれているため、その形態はシンプルで類型的なバラエティに貧困な道具である。しかし、その背後にある伝承は、先に述べたようなサケをめぐる再生観、世界観と無縁ではなく、この棒は単なる漁具以上の民俗的意味を具備している。

通常、漁具に関する研究では銛、網、簗など、魚自体を直接獲得するための一次捕獲具に関心が偏りがちであるが、ことサケに限っては漁獲した後に使用する二次的漁具である魚叩棒が民俗学的に意義深い。それは、魚叩棒にまつわる豊富な伝承が、そこに投影された人間の精神世界を教えてくれるためである。

本稿では、一見何の変哲もない漁具に実は儀礼的な道具としての意味が、そして、生業活動の中で、一見プラグマティックに繰り返されているかのごとくとらえられる魚叩行為に、儀礼的な所作が読み取れることを示し、その背景にあるサケをめぐる民俗的な再生世界を概観することが目的である。素材としてはアイヌ、北西海岸インディアン(以後、北西海岸ネイティブと表記する)、日本の事例を提供する。これらの民族は北太平洋沿岸に居住し、類似した文化的な脈絡で位置付けられる(North Pacific Rim culture)場合もあるが(Fitzhgh and Crowell 1988)、本稿ではそのような文化的な関連性を考慮したものではなく、また歴史的な系譜等に問題を布衍することも意図していないことを付け加えておく。

本号では、まず北海道において狩猟・採集・漁撈を中心に生計を営み、サケと密接に関わってきたアイヌの事例を取り扱い、次号で、北西海岸ネイティブ、そして日本本州の事例を分析し、魚叩棒と魚叩行為の意味について考える。以下、アイヌに伝承されてきた魚叩棒の形態・装飾・材質など物質面の特徴を検討し、そこに込められている精神世界を、儀礼的な所作、口頭伝承などから読み解いていく。

図1　「刻入丸頭付加工材」(岩手県萪内遺跡出土、全長426ミリ、直径40ミリ、岩手県埋蔵文化財センター1982：506より転載)

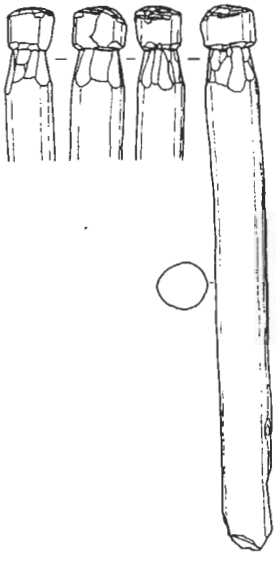


図2　「棒状木製品」(北海道江別太遺跡出土、全長500ミリ、直径39ミリ、北海道先史学会 1979：55より転載)

1| アイヌの魚叩棒の実例

1960年代に、民族学的資料も援用し、縄文文化の東と西の差異を説明する画期的な視座、「サケ・マス論」が山内清男によって提唱された(山内1964、1969)。生態的に類似した環境における文化の基盤をとらえようとした、野心的なこの仮説は考古学界に広く膾炙し、その後多くの研究者によってその正当性について論議が継続されている(松井1981、1985、1994、四柳1976、1978、1983、高山1974、大林1971、岡本1961、西本1984、渡辺誠1967、1970、1973)。

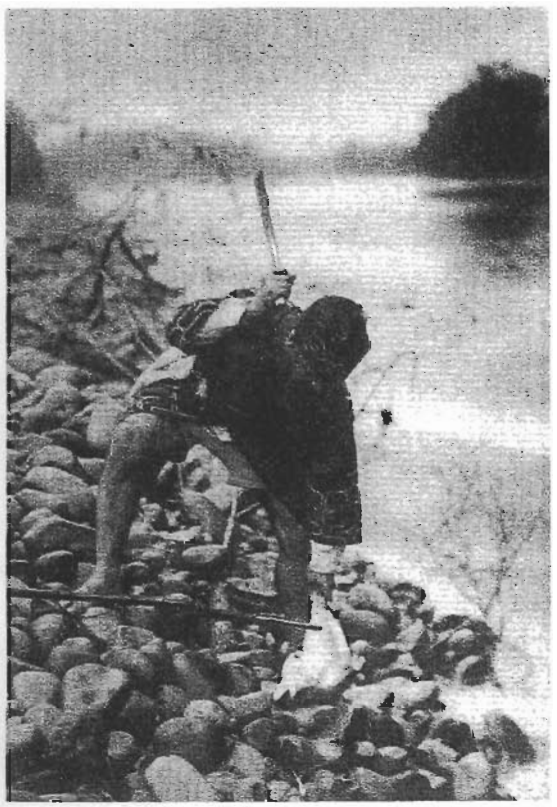
本稿では、あえて民俗学の立場から表明するが、我々はこの仮説の正否の如何にかかわらず、サケの織りなす文化的な構成体を、もっと積極的にとらえなければならないし、究明するに足る民俗事象は未だ多く存在する[2]。ただし、そこで導かれた見解はすぐに、直接、考古学的な資料の解釈に布衍できないことは言うまでもなく、その慎重な検討作業は考古学者に委ねられている。

本稿で取り扱う魚叩棒についての考古学的な見解を、考古学の門外漢の筆者は十分におさえておらず、また考古遺跡からの魚叩棒出土例の実態をも正確に把握していないが、管見の限りでは魚叩棒とされる出土品は、わずかながらも既に報告されているようである。例えば、岩手県萪内遺跡で出土した「刻入丸頭付加工材」などは「魚頭打棒」と付会して解釈され、アイヌ、北西海岸ネイティブの魚叩棒と関連づけられている(大塚1988：130-131)。また、北海道江別太遺跡では直径30～50ミリ、長さ300～500ミリ、材質トネリコ属の木製品が数点出土しており、やはり「叩き棒」と推測されている(高橋正勝1981：19-25)。また縄文時代中期～後期に、東北北部から北海道南部にかけて分布する「青竜刀形石器」を魚叩棒に比定する考え方も、その分析例の中に見出せる(江坂1965：91、藤本1977：72-74、西脇1991：81-92)[3]。

魚叩棒はサケの撲殺という実用上の目的からしてその全長、直径、重量に己ずと制約がある。暴れるサケの頭頂部を確実に、しかも素早く強打するには、使用者の腕力と技量に相応の長さと、握り、打頭部の太さ、重さが求められるのである。つまり、握りと打頭部の間隔が使用者の腕力に適正と思われるものより長いと、魚叩時に振り下ろされる魚叩棒のスピードは減退する

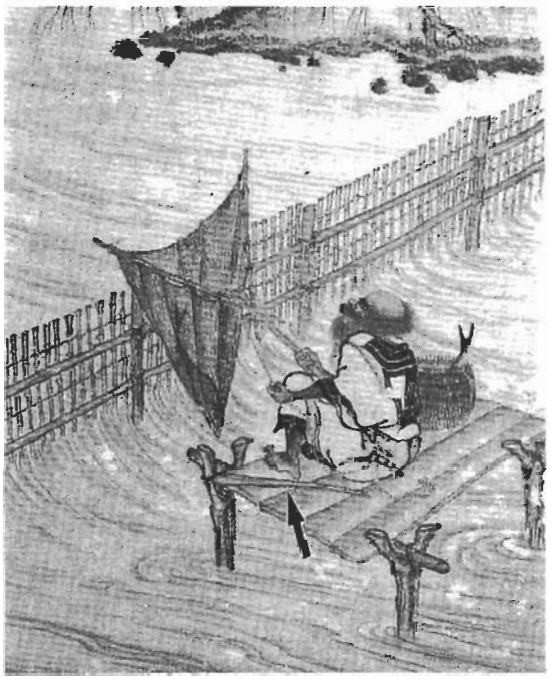
写真1　アイヌによる魚叩行為1（アイヌ文化保存対策協議会 1969：57より転載）

写真2　アイヌによる魚叩行為2(金田一 1941：口絵より転載)



し、また、短過ぎると打力が低下する。握りの太さが握力に相応しないと、十分な打力は望めないであろうし、握りと打頭部の太さがアンバランスな場合も同様である。

写真3　「七月鱒漁之図」に見られる魚叩棒(平沢屏山画『蝦夷風俗十二ヶ月屏風』(1800年代中～後半作、市立函館博物館所蔵）より転載)



筆者が本州で確認した魚叩棒には、握りと打頭部の直径が大きく変わらない直棒的なものや、先端の打頭部をやや太めにし、握りは削り込んで持ちやすくしているもの、若干の反りが入っているものなどがある。北西海岸ネイティブでは、次号で詳述するように装飾的な造形面が多様であるが、そのような魚叩棒は本州ではほとんど見られない。一方、アイヌで用いられていた魚叩棒には、北西海岸ネイティブとは異なるものの装飾的、信仰的な加工（削りかけ）が見受けられる。

アイヌにとってサケは、シカなどとともに重要な食糧としての地位を占めていた。そのため、サケをカムイチエプ(kamuy-cep、神の魚)、シペ(sipe、真の魚)と呼び慣わし、丁重に取り扱った。サケの漁獲法はマレク、マレッポ(marek、銛）やテシ(tes、留め)、ウライ(uray、簗)漁などで、各コタンごとにその展開は変わってくる。いずれの漁獲法でも、最終的には魚叩棒でサケのウプシヒ(upsihi、頭頂部）を打ち絶命させる。

アイヌの使用する魚叩棒は一般にイサパキクニ、イサパキッニ(i-sapa-kik-ni、それの頭を叩く木）と呼ば

れ、特別な道具としてあつかわれている。イパケニキックニと呼ばれる地方（釧路）もあり（犬飼1969：351）、また樺太アイヌではイサパタニ、イサパターニ（i-sapa-ta-ni、それの頭を叩く木）と言われていた（知里真志保1944：177-178、高橋規1988：94）。以下、アイヌに関する民俗報告書等で実在の明確なものを事例として提示する。なお、魚叩棒の名称は引用した文献上の表記によった。

事例1　「魚たたき棒（イサパキクニ）」

苫小牧市博物館所蔵。複製品で、材質・形態は不詳。全長460ミリ、直径32ミリ。（苫小牧市博物館1986：55）

事例2　「なづち棒」

釧路市立博物館所蔵。全長471ミリの魚叩棒で、握りを細めに削り、握り手が滑らないように握りエンドをはっきりと丸く削り残し、ちょうど野球のバットのような形態をしている。握りエンドには細縄を付してある。サケ漁でサケ・マスなどをとらえた時に頭を叩きとどめをさすのに使われる。ヤナギやミズキなどで作られ、木幣の一種と考えられており、腐れた木や石など使うことは決してなかったという。これはアイヌの資料としてあつかわれているが、このようにバット状の魚叩棒は、アイヌの伝承的魚叩棒には少ない。製作過程で和人が使用した魚叩棒の意匠の影響を受けた可能性もある。「なづち棒」という名称も、本州で用いられている魚叩棒の名称である。（釧路市立博物館1989：68）

事例3　「鮭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）」

旭川地方で収集されたもので市立旭川郷土博物館所蔵。全長360ミリ、直径が最大40ミリ、最小30ミリで、片端には削りかけの装飾が施してある。材質はヤナギ。（北海道教育庁振興部文化課1977：46）

事例4　「鮭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）」

旭川地方で収集されたもので市立旭川郷土博物館所蔵。全長360ミリ、直径33ミリ。全体に樹皮を除去していないのが特徴で、事例3同様の削りかけがある。また中央部にも2か所削りかけ側に向けて切り込みがあり、その2つの切り込みを繋ぐように中心に切り込みが入っている。材質はヤナギ。（北海道教育庁振興部文化課1977：46）

事例5　「鮭の頭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）」

旭川地方で収集されたもので市立旭川郷土博物館所蔵。表皮を剝いで白木に整形してある直棒状の魚叩棒。全体に直径の差が少なく、削りかけは見られない。ミズキ製で全長370ミリ、直径30ミリ。（北海道教育庁振興部文化課1977：46）

事例6　「頭たたき棒（イサパキッニ、i-sapa-kik-ni）」

二風谷アイヌ文化資料館所蔵。二風谷で萱野茂が1972年に製作。全長425ミリ、直径30ミリ前後の直棒で、握りとするために130ミリ程度表皮を削り取ってある。握りと打頭部との境には、10ミリ程の短い削りかけを施している。材質はヤナギ[4]。（北海道教育庁振興部文化課1977：128）

事例7　「なづち棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）」

白老町で収集されたもので白老民俗資料館所蔵。全長452ミリ、直径31ミリ。事例6同様に表皮を200ミリ程剝いであるが、この棒の場合事例6と異なり、白木の部分を打頭部として使用していた。材質はヤナギ。（北海道教育庁社会教育部文化課1979：39）

事例8　「叩き棒（イサパキッニ、i-sapa-kik-ni）」

浦河町で収集されたもので浦河町郷土博物館所蔵。全長325ミリ、直径35ミリ。表皮を残している点、片端に削りかけがある点など事例4の魚叩棒と形態、意匠的に酷似している。特に中央部に2か所施されている切り込みは重要で、事例4と同じくこの切り込みを繋ぐように中央に切り込みが入って、横から見るとH状の紋様になる。機能的に何の必要性も感じないこの意匠が、旭川と浦河という遠隔の地で共通して見られる点は注目される。材質はヤナギ。（北海道教育庁社会教育部文化課1980：23）

事例9　「叩き棒（イサパキッニ、i-sapa-kik-ni）」

浦河町で収集されたもので浦河町郷土博物館所蔵。全長260ミリ、直径20ミリと小型。全体の表皮を剝ぎ取っている。片端が細めに削られており、握りにされ

たのではないか。材質はヤナギ。(北海道教育庁社会教育部文化課1980：23)

事例10 「叩き棒（イサパキッニ、i-sapa-kik-ni)」

浦河町で収集されたもので浦河町郷土博物館所蔵。全長260ミリ、直径30ミリと事例9に大きさ、形態ともに類似しているが、握りと認められる明確な削り込みはない。材質はヤナギ。(北海道教育庁社会教育部文化課1980：24)

事例11 「なづち棒（イサパキクラ、isapakikmi)[5]」

苫小牧青少年センター所蔵。全長348ミリ、直径23ミリ。先端に削りかけあり。また、写真で確認するかぎり事例4、8と同じようなH状の紋様が彫り込んである。材質は不詳。(北海道教育庁社会教育部文化課1981：78)

事例12 「魚打ち棒」

札幌市で収集されたもので北海道開拓記念館所蔵。鶴居村で製作。全長405ミリ、直径35ミリ。材質・形態は不詳。(北海道開拓記念館1981：19)

事例13 「魚打ち棒」

江別市で収集されたもので北海道開拓記念館所蔵。全長427ミリ、直径30ミリ。材質・形態は不詳[6]。(北海道開拓記念館1981：19)

事例14 「魚打ち棒」

恵庭市で収集されたもので北海道開拓記念館所蔵。恵庭市で製作。全長410ミリ、直径38ミリ。材質・形態は不詳。(北海道開拓記念館1981：19)

事例15 「魚打ち棒」

恵庭市で収集されたもので北海道開拓記念館所蔵。恵庭市で製作。全長358ミリ、直径34ミリ。材質・形態は不詳。(北海道開拓記念館1981：19)

事例16 「なずち棒（isapakikni)」

河野本道所蔵。全長367ミリ。直径は不詳。片端に削りかけがある。材質はヤナギ。(北海道開拓記念館1972：50、98)

事例17 「なずち棒（isapakikni)」

旭川近文で収集されたもので河野本道所蔵。全長355ミリ。直径は不詳。事例16同様片端に削りかけを持ち、若干反っている。写真では明瞭に確認できないが、事例4、8、11にみられたH状の紋様に類似した切り込みらしきものが中央付近にある。材質はヤナギ。(北海道開拓記念館1972：50、98)

事例18 「Stick（魚打棒)」

Culinという人物が1912年に収集し、現在ブルックリン美術館所蔵。全長541ミリ。直径・材質・形態は不詳。(小谷1993：155)

事例19 「頭叩棒（イサパキクニ)」

更科源蔵の報告事例。全長・直径・材質は不詳。全体の約3分の2を表皮を剝いで白木にし、白木の部分に2か所削りかけが施してある。更科は屈斜路の事例として報告している。なお、全く同じ魚叩棒が、『アイヌ民族誌』(犬飼1969：345)にも掲載されている。(更科 1976：437)

事例20 「頭叩棒（イサパキクニ)」

同じく更科源蔵の報告事例。全長・直径・材質は不詳。全体に表皮を残しているが、この魚叩棒の特徴的なのは、両端に削りかけがついていることである。削りかけは双方とも両端方向に切れ込みをいれられている。更科は近文の事例として報告している。(更科1976：437)

2 アイヌの魚叩棒の特徴

以上、紹介した20例を細かく見てみよう。

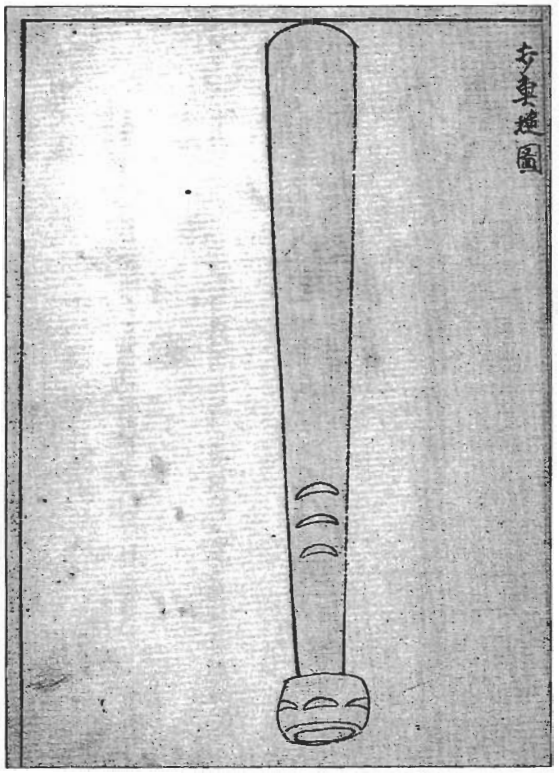
(1)アイヌの魚叩棒の大きさ

アイヌの魚叩棒の全長は最小260ミリ、最長541ミリと数値に幅があるが、平均は約380ミリで、多くの棒がこの平均値とそれほどかけ離れた値を示さない。直径については計測箇所を明示していないデータが多く、最大径、最小径の区別ができない。データ上は、おおむね30～40ミリの値を示す。

(2)アイヌの魚叩棒の形態

アイヌの魚叩棒は、形態としては、打頭部と握りの太さにあまり差がない直棒型が多い。握りの皮を剝いで削り込んだもの(事例6)、あるいは打頭部の樹皮を剝いだもの（事例7）もみられるが、おおむね直棒的

写真4　「打魚槌図」(田中勢一郎家所蔵、谷元旦 1799より転載)



である。若干、反っている棒(事例17)もみられるが、これは加工によって反らしたのではなく、もともと緩やかなカーブを描く曲木を原材料として使用したようである。また、握り手が滑らないように握りエンドをはっきりと丸く削り残した、バット型の魚叩棒(事例2)もあるが、至って少数である。この場合、打頭部と握りの直径の差は、直棒型より大きくなる。筆者は事例2の紹介で、その製作過程で和人が使用した魚叩棒の意匠の影響を受けた可能性もあることを示唆したが、これと類似する魚叩棒はアイヌの伝承的魚叩棒にはほとんどみられない。ただし、寛政11年(1799)、絵師谷元旦によって描かれた『蝦夷器具図式』には、「打魚槌図」という名称で、握りエンドを有したバット型の魚叩棒が登場する(谷1799)。従って、このバット型がアイヌの在地型であることは完全に否定できないが、元旦記載時には和人文化が相当アイヌの生活に混入していたこともあり、その形式の保有される文化的背景はまだ一考の余地がある。

(3)アイヌの魚叩棒の材質

材質は圧倒的にヤナギが多い(事例3、4、6、7、8、9、10、16、17)。わずかにミズキが1点みられる(事例5)のみである。本稿で例示したアイヌの魚叩棒以外の民俗報告例でも、イサパキクニはヤナギかミズキで製作するものであるという一般的な材質規定が明示されている(知里真志保1959：72-73、更科1976：436)が、キキンニ[7](kikinni、エゾノウワミズザクラ)でも作ることも報告され(知里真志保1953：119-120、アイヌ無形文化伝承保存会1984：94)、また樺太アイヌではヤナギとともにハンノキ(樺太アイヌ語名は不詳)を用いることがある旨報告されている(知里真志保1944：178)。

(4)アイヌの魚叩棒の装飾

筆者が本稿で提示したアイヌの魚叩棒には、その多くに叩くといった実質的な機能にはほとんど寄与しないと思われる装飾が見られる。その装飾のほとんどは削りかけである。削りかけがみられるのは事例3、4、6、8、11、16、17、19、20である。ほとんどが片端1か所に削りかけが施されているが、事例19は同じ向き2段に削りかけがある。また、事例20はやはり2か所に削りかけが見られるが、これは両端にあって、しかもに削りかけの切り込みが逆になっており、削りかけが向き合うような形になっている。削りかけを有する魚叩棒の削りかけの大半は、棒の端の方に偏っているが、この端が打頭部に近い先端になるのか、握りに近い後端になるのかはデータ上読み取れない。

また、削りかけがなくとも表皮を完全に剝いで白木にしたり(事例5、9)、打頭部だけ剝ぎ取ったもの(事例7)、握りだけを剝ぎ取ったもの(事例6)などがあり、皮を剝ぐ部位には規則性を見出しがたい。事例19、20で紹介した更科源蔵が「多くは握る方の皮をのこし、魚の頭を叩く方の皮をとるが、逆に握る方の皮をとるところもある。」(更科1976：436-438)と述べるように、実在例では握りの皮を剝ぐのか、打頭部の皮を剝ぐのか明確な判断を下すことはできない。

3 アイヌの魚叩棒の観念的な機能

アイヌの魚叩棒で特徴的に使用されるスス(susu、ヤナギ)、ウトゥカンニ(utukani、ミズキ)は、アイヌにとってイナウネニ(inau-ne-ni、イナウを作る木)として神聖な木で、本来はイナウの他、イクパスイ(iku-pasuy、捧酒箸)など儀礼的な道具に使用される。アイヌには、ヤナギがイナウネニとして使用されるようになった次ぎのような起源譚が伝承されている。

「昔、コタンカラカムイ(国造りの神)が、この人間の国土を造るために神の国から降りてこられ、国土を造り終えて神の国へ帰られるとき、アイヌモシリ(人間の国土)で用いた物を神の国へ持ち帰ることはできないので、この地上で食事をするときに使っていた箸を大地に突きさして帰りました。するとその箸に根が生えて一本の木になりました。それが柳なのです。それを知ったアイヌたちは「神の使っていた箸から生えた木だ。もったいないからイナウを作ろう」と言って、この柳の木を削って美しいイナウを作り、神様にあげるようになりました。」(萱野1978:284)

神の国において、ヤナギは木肌が白いので白金に、ミズキは黄色いので黄金に変ずると言われ、神への贈与物としてのイナウに用いられる。以上のように、神聖とされる木をアイヌが魚叩棒に使用する点には注目せねばならない。何故、このような神聖な木を日常の漁撈活動の場で、そして魚叩行為という卑近な局面で用いるのであろうか。

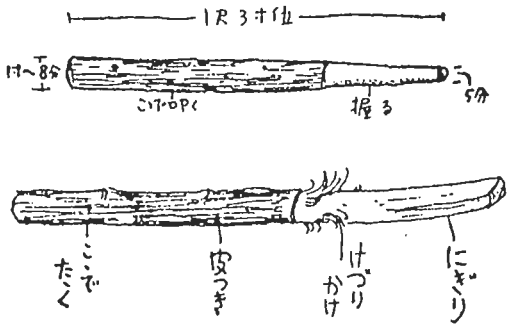
アイヌにおいて、サケの食糧の中に占める地位が高いことは先にも述べたが、その重要さに比べ、それに与えられる観念的な地位は低い。一般的にアイヌの神の序列は鳥、獣、魚類の順で、鳥の王者シマフクロウがカムイチカプ カムイ(kamuy-chikap-kamuy、神である鳥の神)、モシリ コットリカムイ(moshir-kor-tori-kamuy、国を司る鳥の神)など多くの名称を持ち、獣の王者クマよりも上座に位置付けられる(萩中1979:9-10)。それらのカムイを神の国へ送るのには、より丁寧な祭式に則ってイナウも特別の装飾、数量、材質が与えられる。

例えばクマやシマフクロウの魂送りであるイオマンテ(i-omante、それを送らしめる)にともなう盛大な儀式とそれにともなうイナウは余りにも有名であるし、山中の狩猟でクマを捕った際に行われるカムイオプニレ(kamuy-opunire、神の出発)も1頭ごとに行われる。しかし、サケに関してはイナウコルチエプ(inau-kor-cep、イナウをあげるサケ)[8]やタンヌパクノアンポロシペ(tannu-pakno-an-polo-shipe、イルカ程もある大きなサケ)に、簡単なイナウを捧げるのみである。前漁儀礼、初鮭儀礼、終漁儀礼[9]などにもイナウを用いるが、これ自体は豊漁祈願、豊漁感謝の意味を持ちサケの魂送り的な要素は少なく、サケの遡上を支配する神などを対象としているのである(萩中1979:9-10)。シマフクロウやクマはそのもの自体が動物の姿を借りて人間の世界へやって来たカムイであるのに対し、サケはカムイチエプというものの神魚というより神の魚、神の使わしめる魚といった意味合いの方が大きいという(更科1976:434-435、山田1994:111)。そのため純粋に儀礼として特化し、特別に形式化されるサケの魂送り儀礼は少ない。

しかし、サケにはイオマンテのような儀式化された魂送り儀礼を形成せずとも、観念的に齟齬をきたすことはなかったようである。何故なら、それは日常的な漁撈活動の一部に儀礼的な所作を織り込むことで解消されていたためである。その漁撈活動の一部こそ、本稿で問題としている魚叩棒を用いる魚叩行為で、これ自体がサケの魂の送り返し儀礼の役割を担っていたと考えることができるのである。

あらためて儀式として魂送り儀礼が統合化されるのではなく、生業活動の中で行われるプラグマティックな行為に、儀礼的な意味が付加されていたのである。もともと、たまにしか捕れない陸上獣や海獣と違って、ある期間にわたって大量に到来するサケに対し、個別的に洗練された儀礼を行うことは不可能である。それは漁撈活動に儀礼的な所作を持たせることによって代替可能であったわけである。それ故、相対的にサケを殺

図3　知里真志保による魚叩棒のスケッチ（知里 1944：178より転載）



上が樺太、下が北海道

す魚叩棒、魚叩行為には儀礼的な要素が多く見出され、それが経済的意味を越えた儀礼的意味としてアイヌに重要視されるのである。

このように漁撈行為としての魚叩行為の中に、儀礼行為としての意義が付け加えられているために、魚叩棒（イサパキクニ）はイナウと同じ神聖な材料で作られてきた。むしろ、イサパキクニ自体がイナウでもあると言った方が良いかもしれない。それはサケの頭を叩き撲殺する際に「イナウコル、イナウコル（inau-kor, inau-kor、イナウをお持ち、イナウをお持ち）」という呪言を唱えることからも理解できる。

知里真志保は、アイヌによってこの魚叩棒は神に捧げる木幣（イナウ）の一種と考えられており、サケはこの木幣を貰うことによってはじめて、大手をふって神の国へ帰ることができ、そのためこの棒をアイヌは特に大事にし、漁期ごとに新調して、用が済むと戸外の幣場に持っていってサケの魂を送り返すと論じている。そして、腐れ木や石でサケの頭を叩くタブーを紹介している（知里真志保1959：72-73）。また、明治10年（1877）より40数年にわたりアイヌと接触を持ったBatchelorは、アイヌの漁師が“head-striking-stick（頭叩き棒）”と呼ばれる太いヤナギの棒で、捕ったサケを撲殺しており、この行為には「送り」の観念とサケの再生観が反映している旨報告している（Batchelor 1927？：401）。彼はまた別稿でも、アイヌの魚叩棒について以下のような興味深い報告を残している。

「鮭を殺すに特筆に値する珍奇なものがある。アイヌは鮭漁に際し常に二尺位の太き柳棒を携へ之で鮭を敲き殺すので、此棒をイサパ・キク・ニ「頭敲棒」と云ふ。アイヌの説によれば鮭は石又は他の木で敲かれるを好まず柳棒で殺さるるのを甚だ喜ぶのである。真にイサパ・キク・ニを尊敬している。若し他の物を用ゆれば姿を変じて遁げるとしてある。鮭問題に関して一アイヌが私に語って云ふ。「鮭の小型種はイナウ・コト・チエプ「イナウを捧げた魚」と云ふ。他の一種はカムイ・コイヅツカ・チエプと云ひその頭部は大呪物として貴重されている…此種のものを獲た時は之を火前に置いて拝し、次に頭を切り取りイナウを捧げて後体を料理して食ふ。之を殺すに用いた棒にもイナウを捧げて拝せねばならぬのである。」」（Batchelor 1925：406）

筆者が本稿で提示したアイヌの魚叩棒には、その多くに叩くという実質的な機能にはほとんど寄与しないと思われる削りかけの装飾が見られることを既に述べたが、これもまた魚叩棒がイナウであることの意匠的な明かしとなる。削りかけの長さはイナウに比べかなり短いが、この装飾に込められた心意はイナウに込められるものと同じであろう。また、削りかけがなくとも表皮を完全に剝いで白木にしたり（事例5、9）、打頭部だけ剝ぎ取ったもの（事例7）も共通した心性に基づく加工と思われる。先に、事例4、8、12、17（？）に共通してH状の紋様が彫り込んであることを指摘したが、これはイナウに一般的に施されているカムイイトッパ（kamuy-itokpa、神の印）的なものか、エカシシロシ（ekashi-shiroshi、家印）、エカシイトッパ（ekashi-itokpa、家紋）と同様の意匠的な役割を持つ可能性もある[10]。

魚叩棒に込められた儀礼的な要素は、①材質は聖なる木であるヤナギ、ミズキを用い、腐れ木や石などを用いない、②普通の棒ではなくイナウのように削りかけ等の装飾をこらす、③これを用いる時呪言を唱える、④漁期ごとに新しく更新し、最終的にはイナウと同じ

く幣場に供える、と大きく4点に整理されるが、さらに細かくその儀礼性を強調する地域もある。例えば樺太アイヌでは、複数の人間が船にのってサケを捕る川に向かう時、魚叩棒は1艘に1本と決まっており、その1本の魚叩棒を保管して置くところが船の先のところであらかじめ決まっている。そして、この魚叩棒を使う人も決まっており、サパシタイキアイヌ(sapa-sitayki-aynu、頭を叩く人)、イサパタアイヌ(i-sapa-ta-aynu、それの頭を叩く人)と呼ばれていた。魚叩棒が折れた場合は、その日はそれで漁をやめ、次ぎの日に新調したもので再び漁をするという(高橋規1988:94-95)。このような魚叩棒の使用数、使用者の制限もまた魚叩行為の儀礼性を補強することとなる。

4 口頭伝承に投影される魚叩行為の意味

さて、アイヌが魚叩棒をイナウとし、魚叩行為をサケを神の世界へと送り返す儀礼として位置付けている証左は、以上のような魚叩棒の材質・意匠・取り扱い方、魚叩時の呪言といったもの以外からも抽出できる。それは口頭伝承の中にあり、サケの遡上と魚叩棒・魚叩行為の意味を説明し、それを裏付ける“サケの神話”としてアイヌによって言い伝えられてきた。まず、魚叩行為とサケの送り返し儀礼を詳しく解説する“サケの神話”を紹介しよう。

それらは神が一人称で語るカムイユカラ(kamuy yukar、神謡)で、①「新冠川を遡上しなくなったサケ神の物語」、②「ハシナウ神が自ら語った」、③「フクロウの神が自ら語った謡(コンクワ)」という3つの話である。

①「新冠川を遡上しなくなったサケ神の物語」

「私(サケの神)は、他の神々が人間たちの村の良いうわさを言うので、その村を訪れてみたいと思った。それで仲間とともに海を陸沿いに、人間たちの村へと進んでいった。やがて鵡川の河口にたどり着いた。ここでこの川を遡上して行こうかと思い、我々の仲間は、金の杓子や白金の杓子をとり出して川の水をくんで味見したが、水の味がとてもまずい。それでもっとうまい水のある川を見つけて遡上しようと先に進んだ。

今度は厚別川の河口にたどり着いた。ここでも先ほどと同様に川の水の味見をしたところ、やはりまずい。この川をあきらめ、さらに先に進んだところ新冠川の河口にたどり着いた。例によって味見をしたところ、とても味が良いのでこの川を遡ることにした。川づたいに進むと、新冠に住む若者がマレク(marek、銛)で魚をねらっていて、我々の仲間はそのマレクで陸に投げ上げられた。川原で若者はススーイサパーキクニー(susu i-sapa-kik-ni、ヤナギで作った魚叩棒)を手に持って、魚たちの頭を叩き、殺した。ヤナギで作った魚叩棒で我々の仲間が殺されることは、なお一層、自らを神ならしめる、自らを神格化することになるので、魚叩棒で叩かれた仲間はとてもそのことを喜んでいた。

それから残った我々はさらに川を遡って行った。すると今度は別の若者が草刈り鎌を身につけながら川そばに下って来た。同じように我々の仲間はマレクで陸に投げ上げられた。ところが今度は草刈り鎌で叩かれたのであった。草刈り鎌というものは、悪神を叩くものである。悪い神を追いやるのに使うものが草刈り鎌であるのに、仲間がその草刈り鎌で叩かれる。それが我ながら哀れになり、仲間は泣いて泣いて、川を途中から引き返し帰っていった。そのことから新冠川には、それ以後そうした魚の群れは遡って来なくなった。」(鹿戸1988:81-95、引用者要約)

②「ハシナウ神が自ら語った」

「ある日のこと窓のところに影がさした。よく見ると大きい杯が捧酒箸とともに輝いている。その杯に託された言葉はこうであった。「狩猟の神よ、貴い神よ。私の言うことをよく聞いてほしい。私はオキクルミというものだが、アイヌの村が飢餓に襲われ、それしかないヒエ、それしかない麹を集めて酒を醸した。貴い神に仲立ちしてもらい、こっそり神々にお願いをしてほしい。」この酒をもとに大勢の神々を招待し宴を催した。

そこでシカの大神(鹿を司る神)に「何故にシカを

呼び戻したか」と尋ねた。するとシカの大神は「私の仲間がアイヌのところへ客として行くと、頭を切り捨ててイナウもやらないで捨てられるまま。そのことを悲しみ泣きながらやって来る。腹を立てた私は、仲間のシカを呼び戻したがシカの骨一つだけ投げ降ろしてやろう。」と言ってくれた。

そこで今度は魚の大神に「何故に魚を全部呼び戻したか」と問いただした。すると魚の大神は「私たちの仲間がアイヌのところへ客として行くと、流木の上で、ただの木の上で叩かれて、腐れ木で叩かれて、別の魚たちは石で叩かれた。石をくわえて泣いてくる者、腐れ木をくわえて泣いてくる者。これに怒った私は、魚たちを呼び戻したのだ。魚の骨一つだけ投げてあげよう。」と言った。魚の大神はそう言いながら魚の骨一つだけ投げると、水底には石で腹がすりむける程、水面には陽で焼けこげる程魚がたくさんになった。シカの神が投げた骨は、たくさんのシカの群れになった。それでアイヌが生き返った。

アイヌたちにこういうわけだと夢で知らせた。アイヌたちは感謝しながら酒とイナウで詫びをした。そういうわけでサケを叩く時にはヤナギの木で叩かねばならない[11]。」(黒川1971：58-69、引用者要約)

③「フクロウの神が自ら語った謡（コンクワ）」

「私は談判したいことがあるが年老いてしまったのでできない。誰か雄弁で使者として自信のある者があったら使わしたいと言ったら、カラス、カケスなどがやって来たが、長い談判を居眠りして覚えることができない。すると若くて美しい川カラスが来た。彼は長い談判を聞き終えると、天窓から出て天国へ行ってしまった。その談判の内容は、「人間の世界に飢饉があって、人間たちは今にも餓死しようとしている。どういうわけかと見ると、天国にシカを司る神様と魚を司る神様とが相談をして、シカも出さずに魚も出さずにいる。これを見て私は腹が立っている。」というもので、これを伝えるためにシカの神、魚の神に使いを立てた。

それから幾日もたって、川ガラスが帰って来た。そして返し談判を始めた。「天国のシカの神や魚の神が、今日までシカを出さず魚を出さなかった理由は、人間たちがシカを捕る時に木でシカの頭を叩き[12]、皮を剝ぐとシカの頭をそのまま山の木原に捨ておき、魚を捕ると腐れ木で魚の頭を叩いて殺すので、シカどもは裸で泣きながらシカの神のもとへ帰り、魚どもは腐れ木をくわえて魚の神のもとへと帰る。シカの神、魚の神は怒って相談をし、シカを出さず魚を出さなかったのであった。しかしこの後人間たちがシカでも魚でもていねいに取り扱うということならば、シカも出すし魚も出す。」と川ガラスは、シカの神と魚の神が言ったということを申し立てた。私はそれを聞いてから川ガラスの若者に賛辞を呈して、見ると本当に人間たちはシカや魚を粗末に取り扱ったのであった。

それから以後は決してそんなことをしないように、人間たちに眠りの時夢の中に教えてやったら、人間たちも気が付き、それからは幣のように魚を捕る道具を美しく作り、シカの頭もきれいに飾って祭る。それで魚たちは喜んで美しい御幣をくわえて魚の神のもとへ行き、シカたちは喜んで新しく月代をしてシカの神のもとに立ち帰る。それをシカの神や魚の神は喜んで、たくさん魚を出し、たくさんシカを出したのであった。人間たちは今はもう何の困ることもひもじいこともなく暮らしている。」(知里幸恵1922：94-107 、引用者要約)

まず①のユカラであるが、これは新冠川にサケが遡上しなくなった由来譚として語られている。新冠川にたどり着いたサケたちは、ヤナギで作られたススーイサパーキクニーで撲殺されることは、なお一層、自らを神ならしめる、自らを神格化することになるので、そのことを喜ぶと表現されている。一方、悪神を追い払うために使用する草刈り鎌で撲殺したために、結局は遡上しなくなるわけで、魚叩時には決められた魚叩棒を使用することを規定する話になっている。これは②や③のユカラでも同様である。

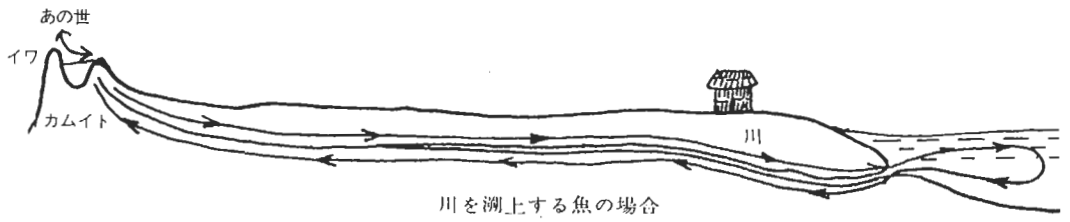
②のユカラでは客として人間の世界を訪れた同族が、流木や普通の木、腐れ木、石等で叩かれて、泣きなが

ら帰ってくるために魚の神が怒ってその遡上を停止させた。故に、その理由を神に告げられた人間は、それ以後、サケの魚叩時にはヤナギの木で叩くという魚叩棒使用の由来譚になっている。③も同様に、人間どもが腐れ木で魚の頭を叩いて殺すので、魚を司る神が怒りサケを遡らなくし、これを神の告げで知った人間がそれ以後は幣のように魚を捕る道具を美しく作るようになったという魚叩棒の由来譚になっている。

②、③には魚が叩かれた棒を口にくわえ持って帰る風景が描かれているが、これに表出している心意は神への贈り物としてのイナウと同一である。アイヌはイナウを霊魂の送り返しの儀礼的な装置として利用し、それを「舟の役をなすもの」と認識しているが(渡辺仁1963:294)、魚叩棒もまた、「舟の役をなすもの」としてサケの魂を送る儀礼的な装置として機能するのである。

複雑なアイヌの霊魂観を検討した藤村久和は、サケ等の遡河性魚類に関する霊魂の往還について詳細に分析している。それによると、遡河性の魚類の場合、人によって送り返される場合、川においてその差し出す魚叩棒が木幣となり、それを魚(霊魂)は受けて川をさらに遡上してカムイトー(kamuy-to、神の沼湖)に

図4　霊の往還経路(藤村 1975:70より転載)



到着し、イワ(iwa、山、岩山)を通ってあの世へ入るとされる。またこの世への回帰は、霊魂があの世→イワ→カムイトー→川→大海と行って、肉体を纏い成長しきるとあの世へと帰るべく再び川を遡上することとなるという(藤村1975:69-72)。つまり、サケの生物学的な遡上の循環は、霊魂の往来という形で語られる観念的なサイクルとして存在していたわけである。アイヌのサケの回帰に関する論理は、4~5年の回遊を経て成長したサケが遡上し産卵してまた海へ帰って行くといったような、現代の我々が持つ生物科学的な論理だけではない。そこにはサケを利用するという現実的、実際的な漁撈行為も、その回帰循環系の一部分として合理化する観念的な論理が成立していたのである。そして、この循環系の区切り目に行われるのが、サケに対する魚叩行為なのである。

日常の漁撈活動の中で繰り返されるイサパキクニでの魚叩行為は、サケを殺す行為である。ただし、それはただ単に生物学的にサケを死に至らしめる行為としてあるのではなく、観念的にサケの霊魂と肉体を分離し、食糧として有益な肉体を人間の世界へ、また残された霊魂をそれを支配する神の世界へと移行させるための呪術的な意味を持つ儀礼なのである。神への使わしめ、あるいは交換財として表現されるイナウとしてのイサパキクニは、肉体と霊魂を分離する呪具であり、霊魂の移行を促進させる「触媒」のような働きをするのである。そして、サケを支配する神を想定し、それと人間、サケとの3者の関わりにより表出する論理のもとにサケ漁は展開される。

筆者はかつて、以上のような魚叩行為をサケの「死の儀礼」と位置付けたことがある(菅1986、1990)。この儀礼は、さらに「生の儀礼」と対になって、構造的なサケ回帰の循環系を形作っている。霊魂・肉体の分

離、霊魂の送り返しが「死の儀礼」だとすると、それに対置される「生の儀礼」は霊魂・肉体の統合である。その細かい内容については、既に検討しているので詳しくは述べないが（菅1990）、「生の儀礼」は、初鮭儀礼に多く見られ、換喩的表象となる肉体の一部を川に流したり、あの世に送ったりすることにより霊魂と肉体を統合させ、サケの生命体を復活させるという思考がその儀礼に投影されている。例えば、十勝川流域などの初鮭儀礼の際に、下顎骨を川へ流していた儀礼的な所作がこれにあたる（渡辺仁1977：402-403）。このような思考は、神話的な世界にも投影されており、前掲の②のユカラなどには魚の大神が「骨一つだけ投げてあげよう」と言いながら、川に魚の骨一つだけ投げると、水底には石で腹がすりむける程、水面には陽で焼けこげる程魚が現れたと描写されている。Batchelorが魚叩行為にサケの再生観を見出していたことは先に指摘したが、「死の儀礼」としての魚叩行為は単体として存立しているのではなく、上記のような「生の儀礼」と対置されて、生と死の論理を構成しているのである。

次に提示する、旭川で伝承されていた「我が子を月に召される母親の物語」というカムイユカラには、サケ自身がおのれの再生について語る場面が描かれている。

「ある家にものぐさな息子がいた。その母が水汲みをさせようと何度も頼んでも言うことを聞かない。半ばあきらめかけた頃、何を思ったのか小刀をとり出し、囲炉裏の炉ぶちを突きながら「炉ぶちは人間が面倒をみて、上を掃いたり拭いたりしているので、自分は体を動かすこともなくじっとしていられる。実にうらやましいことだ。」と言って、突然水汲みに出かけた。しかし、その息子はその後、家には戻らなかった。

大変心配した母親は、あたりを捜したが誰一人知っているものはいなかった。もしや川に落ち流されたのではないかと川を下ってみると、ウグイたちが遡ってきた。このウグイに息子の消息を尋ねると、ウグイの頭目は「我々は、毎年遡って来ては人間たちに食われる。食べられるのは良いのだが、人間たちは我々に「骨だらけの魚めが！」と身勝手な文句を言う。あなたの息子の行方を知っているが、人間の身勝手な文句に腹を立てているから教えてやらない。」と言って、そのまま通り過ぎていった。

母親はさらに川を下ると、サクラマスたちが遡って来た。このサクラマスに息子の消息を尋ねると、サクラマスは「我々は、毎年遡って来ては人間たちに食われる。食べられるのは良いのだが、人間たちは我々に「焼いても煮てもベトベトしている！」と身勝手な文句を言う。さらに「フシコイパーキクニ（husko ipakikni、古い魚叩棒）で我々は頭を叩かれた。半ば腐った古い魚叩棒で打たれたので、どうやっても心地よく我々は蘇生することができない。だから教えてやらない。」と言って、そのまま通り過ぎていった。仕方なく、母はさらに下り、遡って来たイトウに尋ねたがやはり断られた。

母はさらに下ると、サケの群れが遡って来た。やはり同じように尋ねると、サケは快く答えてくれた。「人間の国土に我々がやってくると、人間たちは「カムイチエプ（kamuycep、神の魚）と敬って口々に言いながら、アシリーイパキクニ（asir ipakikni 、真新しい魚叩棒）を手に持ち、我々は頭を叩かれ、きれいな下敷きの上に我々を安置した。真新しい魚叩棒で我々はいつも頭を叩かれたものだから、それでもって我々は幾度も心地よく蘇生して我々の国土（この世）に戻って来て、感謝しているのでお知らせいたしましょう。」とサケは言った。息子は怠け者で、小刀で炉ぶちを突いては身勝手な文句を浴びせかけたものだから、心根の良くない炉ぶちがあらゆる神に訴え、天界の神はそれを聞き届けた。「それほどの怠け者であるなら月の中に立たせておこう」と神は言って、息子は月の中で立たされているという。母が空を見上げると、驚いたことに月の中に息子が立っている。息子は反省して自分の行状を嘆き、これを戒めとして人びとに伝えてほしいと母に話した。息子を失うこととなった母は辛さを堪え、家へ戻って誰彼なく息子の伝言を伝え、決して怠

けたりものぐさをしないように訴え続けた。」(杉村1988：249-267、引用者要約)

この伝承からサケが他の魚類（ウグイ、サクラマス、イトウ）に比して、いかに丁重に扱われていたかわかる。その丁重さは、現実にある魚叩行為で表現されている。サクラマスは古い腐れかかった魚叩棒で叩かれたので母の質問に答えなかったが、サケはいつも新しい魚叩棒で叩かれたために感謝して母の質問に答えた。丁重なもてなしとして、真新しい魚叩棒の使用が位置付けられているわけである。さらに重要なのは、以下のサケ自身の言説である。

「アシリーイパーキクニアニ　アンパケ　アンキクペネクーシュ　アニ　アネヤイカッチピーキワー　アンコロシッタ　ホシッパアンワー　ヤイライケアンクーシュ (asir ipakikni ani an=pake an=kik pe ne kusu ani an=eyaykatcipi ki wa an=kor mosir ta hosippa＝an wa yayrake=an kusu、真新しい魚叩棒で我々は、(いつも)頭をたたかれたものだから、それでもって我々は（幾度も心地よく）蘇生して、我々の国土（即ち、この世）に（幾度も心地よく）我々は戻ってきて(大層)我々は感謝している)」(杉村1988：258)

新しい魚叩棒で撲殺されることにより、再び生き返って人間の世界へ再訪できるという表現は、先に述べたような、魚叩行為がサケの送り返し儀礼であり、それはサケの生と死の論理の上に成立しているというアイヌの観念的世界を具体的に説明している。

(以下次号)

謝　辞

本稿をまとめるにあたり、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏、新冠町郷土資料館乾芳宏氏には資料の提供等のご高配を賜った。末筆ながら深謝する次第である。

〔註〕

1）本稿でカタカナでサケと表記しているものは、引用部分、特別の種名を明記する場合を除きサケ科一般の魚類を指す。本号で取り扱うアイヌの場合、サケ（*Oncorhynchus keta*）を主体に、カラフトマス（*Oncorhynchus gorbuscha*）も漁獲し、他にベニザケ（*Oncorhynchus nerka nerka*）、ギンザケ（*Oncorhynchus kisutch*）、マスノスケ（*Oncorhynchus tschawytscha*）なども僅かながら漁獲していたようである。

2）サケが民俗学的に重要であることは本文中でも述べた通りであるが、このような重要性は考古学で言われるところの「サケ・マス論」と直接結びつくものではない。もちろん資源としてのサケが、他の狩猟・採集の獲得物に比べより大きな人口を支持する可能性はあるが、伝承の中で民俗学的に取り扱われる社会の構成、儀礼・宗教など精神世界への昇華という側面から見ると、必ずしもその原動力としてサケが必需であったのか明確ではない。その点から言うと、民俗学的検証法にとっての「サケ・マス論」は過大評価されることはない。

しかし、何度も述べるようにサケは、背後に多くの民俗事象を具備しており、指標的役割を有している。豊富な伝承を育んできたサケ文化が、メジャー・サブシステンスとしてのサケ漁に支えられていたのか、それとも他の生計活動と組み合わされて展開される複合生業に支えられていたのかという問題は、今後も引き続き検討するに値する課題である。現在の聞き書きから過去の事象を再構成するという手段しか持たない民俗学からは、とうてい縄文の文化を理解することはできないが、稲作に席捲される状況下でもサケの民俗文化を保持する人びとが存在したことは、その地域の民俗的な特殊性－北方文化の影響など－を考慮する必要があるだろう。

3）江坂輝弥は「青竜刀形石器」に関する論稿の中で「鮭鱒類が遡行する河川に面するところに所在する遺跡から、僅か一点乃至は二点発見されるこの青竜刀形石製品とどのような因果関係があるものか、皆目まだ検討もつかぬものであるが、遺跡の立地景観からも何か重要な鍵を発見できそうに思う」と述べ、「青竜刀形石器」がサケと何らかの関

係性を有していたことを示唆している（江坂1965：91）。藤本英夫はこの石器をサケを捕る際に使用する道具であると、サケとの関連性についてより直接的な解釈を施している（藤本1977：72-74）。また西脇対名夫はこのような見解と、ニュージーランドのモリオリの民俗例を引いて、この石の棒が魚の頭を一撃してとどめを刺し－すなわち魚叩棒－その魂の依代となる「石魚」であると推測している（西脇1991：81-92）。西脇の考察はあくまで想像の域を出ないので、その正否について論じようもないが、魚を形象した道具を想定することは完全に否定できない。魚叩棒の民俗例にサケをかたどった事例を筆者は寡聞にして知らないが、次号で述べる北西海岸ネイティブでは、アザラシやシャチなど信仰の対象となる動物をその棒の上に彫り込んだものが見られる。また、民俗学者の神野善治は魚叩棒自体ではないが、岩手県津軽石川で行われているサケ儀礼に登場する二又状の人形「又兵衛人形」を、サケの尾鰭を表した「魚形」と類推している（神野1984：156-185）。しかし、神野自身が述べる通り、「魚形」の類例がサケ儀礼としては乏しいために、その説を説得力の弱いものとしている。

4）『アイヌの民具』（萱野1978：184-185）に実測図入りで魚叩棒が掲載されているが、これは事例6と全く同一のものと思われるので本稿では割愛した。

5）この名称はイサパキクラ、isapakikmiとなっているが、カタカナ表記とローマ字表記が対応していないことからして、誤表記の可能性もある。

6）『北方民族展資料目録』（北海道開拓記念館 972：98）に資料番号291番で紹介されている魚叩棒は、事例13と同一のものと思われるので本稿では割愛した。

7）知里真志保は、キキンニ（kikinni、エゾノウワミズザクラ）が魚叩棒に使用されることから、イナウの観念的な変遷について興味深い見解を残している（知里真志保1953：119-120）。それによるとkikiは「何々の身代り（になって危険と戦いそれを追いしりぞけるもの）」で、kikinni は kiki-ne-ni「身代りに出て戦うものーになるー木」がもとであったとする。そして、ここでkikiというのはシトイナウ（situ-inau、棒幣（悪魔を追い払うための棒状の幣））で、イナウは本来シトイナウであったと断言している。彼は以下のように続ける。

「situ-inauわもともと狩猟及び闘争用のsitu（棍棒）だった。もともとその様な棍棒だったからこそ、魔を威嚇して遠ざける機能をもち得たのである。今でこそ「イナウ」わ「カムイ」（神）に捧げる土産品と考えられているが、もとわ魔を追うためのものだった。「カムイ」とゆう語そのものが、地名だとか植物名だとか、古い用語例でわ魔を意味する場合が多い。それが後に文化が進んで神の観念が確立して来ると、「カムイ」わ専ら神をさすことになり、魔わ特にwen-kamuy（悪い・神）だとかnitne-kamuy（頑固な・神）だとか、限定詞を附して呼ばれる様になる。その様にkamuyの観念の内容が魔から神えと変って行くと共に、「イナウ」もまた魔を追うための棍棒の観念から、神をよろこばすためのお土産とゆう現在の幣の観念に変って来たのである。その好個の一例が鮭を殺すに用いる打頭用の棍棒に於て見られる。鮭を捕えた時その頭を叩いて殺す打頭棒わ…言葉の上でわ-ni（棒）として表される。これわ、本来わ鮭をとるための漁撈の具たる「シト」（棍棒）にすぎなかったことを示すものである。ところが実物の形式を見ると、幣の削りかけが附けてあって、もはや単なる棍棒でわなく、まさに歴とした「シト・イナウ」（棒・幣）なのである。…今わ神え贈る「イナウ」（幣）と考えられているのである。situ→situ-inaw →inawの進化がみごとに完成されているのである。」

知里真志保は、棍棒からイナウへという変化について以上のように述べているが、これはアイヌ

の魚叩棒を考えるにあたって示唆的である。魚叩棒に反映されている精神的な世界を理解するには、単に魚叩棒のみを扱うだけではなく、アイヌで行われた“打つ行為”の儀礼文化というものまで広く考えてみなければならない。高倉新一郎はアイヌの紛争解決法に、この打つという儀礼的な行為があったことを歴史的に分析している（高倉1966：350-368)。それによるとアイヌは話し合いで解決しない争いが起きた場合、棒による打ち合い（ウカルと呼ばれる）を行っていたという。ウカルでは、争っているものが2組に分かれ、もろ肌を脱いで「シュト（知里言うところのsitu)」という棍棒で交互に順番に背中を打つ。戦う際に決定的な殺傷能力を持つ刃物弓矢を用いず、棍棒で順序よく打ち合うのは、その行為が人為のルールに強く規制された戦いであり、単なる乱戦ではないことを示している。このウカルは大きな殺戮の一歩前の解決法として、集落内の小さな争いで行われていたとともに、暴風雨などの天災、病魔を追い払うための呪術的な行為として演じられていた。そして、その棒は天然痘流行時には村境に魔よけとして立てられていたのであり、また使用しない時には削りかけを巻いて保存したのである(高倉1966：365)。イナウやシト（シュト)、イサパキクニなどの棒に込められた儀礼的な意味は、使用される各局面において分化しているが、その背景には類似した心意が投影されているのかもしれない。

次号でとり上げる北西海岸ネイティブでも、戦闘用の武器として、そして儀礼的に奴隷を殺傷する道具として特別にclub（打頭棒）が用いられる。そのような場面も含めて広く“打つ行為”を考えることも、魚叩棒の理解には必要であり、その点から鑑みるに『青竜刀形石器』なども魚叩棒である云々は別として、共通した“打つ行為”の儀礼的な文脈に位置付けられるのではなかろうか。

8）サケの遡上が開始された時期に、小さいサケが混じって捕れた場合、これをイナウコルチェプ(inau-kor-cep、イナウをあげるサケ)といって祀る。イナウコルチェプはイナウを欲しがっているサケだという。小さなサケが捕れた時、横座にサケを置き、頭を火の方へ向ける。イナウで包みしばらく供えておく。その後頭を細かくし、なますにして、後は汁ものなどにして家族全員で食べる(北海道教育庁生涯学習部文化課1990：61)。この儀礼には初鮭儀礼の要素が見られる。

イナウコルチェプはその魚体の特異性（極端に小さい）により、祭られる対象となるが、知里真志保はその他アイヌが認識している祭祀されるべき「異様のサケ」についてcaro-noyke-cep(口のねじれている魚)、cinunukap(下顎が川上に向かって東に曲がっているサケ。こういう魚が捕れたらはらわたを除去する)、nochi-koyke-chep(干してクマに背負わせるサケ)、si-cep(大魚)などを報告している(知里真志保1962：44)。

9）サケ漁を行う地域での定期的なサケに関する漁撈儀礼は、漁の開始直前、あるいは口明けに行われる前漁儀礼、シーズン最初のサケを獲得した時に行われる初鮭儀礼、漁期の終了時に行われる終漁儀礼の3つに分けることができる。なおアイヌのサケ漁撈儀礼に関しては「初めてとれたサケに対して何らかの儀礼を行うのは多くの地方で共通だが、漁期の前、漁期の最後に行う儀礼については一部の地方にしか報告がない」という意見もある（北海道教育庁社会教育部文化課1986：135)。

10）18世紀末に描かれた『蝦夷器具図式』に「打魚槌図」という魚叩棒が登場することは既に述べたが、この棒にも実用的な機能に貢献しないと思われる刻みが施されてある。この刻みについて大塚和義は「所持者の家紋〈イトッパ〉itokpaである」と述べている（大塚1991：37)。

11）同様の類話は久保寺逸彦によっても報告されている(久保寺1977)。それは「狩猟の媛神の自叙」（神

謡74）で、サケを蘇生させる場面が鱗を水中に投げ込むというモチーフになっている。

12）先に“打つ行為”の儀礼的な意味に広く注目せねばならないことは述べたが、その対象を動物に限定してみても、“打つ行為”の儀礼性はサケの魚叩行為だけに止まる問題ではない。例えば、このユカラではシカが頭を叩いて撲殺される場面が描かれている。実際にアイヌのシカ猟では、弓や槍を用いる他、頭を叩く棍棒が用いられる。これは主として追い込み猟や、雪、水の中で動きの鈍くなったシカを捕る時に使用されている。北海道開拓記念館には恵庭市で製作・収集されたシカの頭打ち棒が2点収蔵されており（北海道開拓記念館1981：17）、全長約1200ミリ、直径50ミリとサケの魚叩棒に比べはるかに大きい。

一方、クマは弓矢で殺されるのが一番光栄なことで、棒で殴り殺されることを最大の恥辱と考えているとされた（萱野1978：164）。これはカンニ（kar-ni、作る木）と呼ばれる全長1300～1400ミリ、直径70～80ミリのシケルペ（sikerpe、キワダ）製の棒で、人間に危害を加えた獰猛なクマを殺す時にその罪の報いとして敢えて使う。しかし、この棒は他の動物にとっては別の意味を持つ。例えば年老いたイヌを神の国に送り返す時には、この棒を積極的に用いる。何故なら、イヌはこれを神の国に持ち帰ると、それは黄金の棒になるとされ、イヌにとってはそうされることを望んでいると信じられているからである（萱野1978：164）。天塩川流域などでは、最高神であるエゾフクロウを送る時、このキワダで作ったイナウを用いるという（知里真志保1953：104）。先に神の国においてヤナギは白金に、ミズキが黄金に変ずるといったアイヌの伝承を紹介したが、同様にキワダが金、ミズキが銀、ハンノキが銅に変ずるという伝承もあり、その棒がキワダで作られる意味は、魚叩棒がヤナギ、ミズキを中心に作られる意味（イナウとしての魚叩棒）と類似したものであろう。ただし、この棒がクマには恥辱、イヌには歓待と受け止められている点は、動物の観念的な位階・階層・序列制と、それにともなう送り儀礼、送りのための道具の相違が影響しているのであろう。それぞれの動物ごとに、“打つ行為”の儀礼性は異なってくるようであるが、これは送り儀礼の全体的な脈絡の中で考えなければならない。最後に、キツネを打頭して獲得するという内容の口頭伝承を紹介しよう。そのような打頭が現実の漁撈行為にともなって存在したのか明らかではないが、キツネの撲殺にサケの魚叩棒が使用されている点は興味深い。

「パナンペがある日食物をあさりに川へ降りて行って、川原の上に死んだ真似をして長く伸びていると、そこへキツネの群が林の中から出て来た。パナンペを見ると、パナンペが死んでいた。キツネどもは非常にパナンペを哀れんでパナンペの周囲に大勢で輪をこしらえて座り、「かわいそうに柔らかい肉、どうして死んだのだろう？」と言いながらパナンペを哀哭した。大勢のキツネどもが、パナンペの頭だの体だのを揺さぶりながら哀哭する声が騒がしかった。パナンペはひどくおかしく、股の下にサケの頭を叩く棒を隠してあったが、それを握って「何を！」と言いながら跳ね起き、キツネどもを叩き廻って10匹ばかり殺した。大喜びで大きな荷を背負ってつんのめりそうにしながら家へ来て、皮を剝いで見ると本当に脂濃い（おいしそうな）肉の塊であった。大鍋で赤肉だの白肉だの一緒に煮て、毎日本当によい食事おいしい食事しながら暮らしていると、そこへペナンペが来て事の次第を聞いて行く。ペナンペは自分も同じようにやろうと、川原へ出てサケの頭を叩く棒を股の下に隠して死んだ真似をしていた。やはり同じようにキツネたちが来て、ペナンペのまわりを取り囲んだが、キツネのかしらに見破られて逆にキツネどもに襲われ死んでしまった。」（知里真志保1937：77-83、引用者要約）

引用・参考文献

アイヌ文化保存対策協議会、1969:『アイヌ民族誌』(アイヌ文化保存対策協議会編、第一法規)
アイヌ無形文化伝承保存会、1984:『アイヌ生活誌』(財団法人アイヌ無形文化伝承保存会)
犬飼哲夫、1969:「さけ漁」:『アイヌ民族誌』(アイヌ文化保存対策協議会編、第一法規)
岩手県埋蔵文化財センター、1982:『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書ー盛岡市萪内遺跡』(岩手県埋蔵文化財センター)
江坂輝弥、1965:「青竜刀形石器考」『史学』38-1(三田史学会)
大林太良、1960:「Inauの起源について」『民族学研究』24-4(財団法人日本民族学協会編、誠文堂新光社)
1971:「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2-2(京都大学人類学研究会編・講談社)
大塚和義、1988:「縄文の狩猟儀礼」『古代史復元2ー縄文人の生活と文化』(鈴木公雄編、講談社)
1991:「民族誌としての内容分析」『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式解説書』(安達美術)
岡本明郎、1961:「〈サケ・マス〉と〈とち・どんぐり〉ー狩猟社会研究者への質問」『考古学研究』7-4 (考古学研究会)
神野善治、1984:「藁人形のフォークロアー鮭の精霊とエビス信仰ー」『列島の文化史』1(日本エディタースクール出版部)
萱野 茂、1978:『アイヌの民具』(『アイヌの民具』刊行運動委員会、すずさわ書店)
金田一京助、1941:Ainu Life and Legend,kyobunkwan.
釧路市立博物館、1989:『釧路市立博物館総合案内』(釧路市立博物館)
久保寺逸彦、1977:『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(岩波書店)
黒川てしめ(談)、1971:「ハシナウ神が自ら語った」『二風谷の手帖』(日本民話の会)
小谷凱宣、1993:『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』(名古屋大学教養部)
更科源蔵・更科 光、1976:『コタン生物記Ⅱ野獣・海獣・魚族篇』(法政大学出版局)
鹿戸よし(談)、1988:「新冠川を遡上しなくなったサケ神の物語」『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズⅠアイヌ民話』(北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会)
菅 豊、1986:「漁撈民俗試論ー儀礼としての漁撈活動について」『民俗学評論』26(大塚民俗学会)
1990:「鮭をめぐる民俗的世界ー北方文化に見られる死と再生のモデル」『列島の文化史』7(日本エディタースクール出版部)
1994:「サケをめぐる宗教的世界ー民間宗教者の儀礼生成に果たした役割についての一考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』40
杉村キナラプク(談)、1988:「我が子を月に召される母親の物語」『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズⅠアイヌ民話』(北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会)
高倉新一郎、1966:「槌打考」『アイヌ研究』(北大生協高倉記念出版委員会編、北大生協)
高橋正勝、1981:「漁撈の道具ー江別太遺跡出土木製品を中心として」『月刊文化財』218(文化庁文化財保護部監修、第一法規)
高橋 規、1988:「新冠川を遡上しなくなったサケ神の物語・訳注」『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズⅠアイヌ民話』(鹿戸よし(談)、北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会)

高山　純、1974：「サケ・マスと縄文人」『季刊人類学』5-1（京都大学人類学研究会編・講談社）
谷　元旦、1799：『蝦夷器具図式』（本稿では大塚和義監修『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式・復刻版』（安達美術）によった。なおこの元旦本の原本は、鳥取市田中勢一郎家所蔵である。）
知里真志保、1937：『アイヌ民譚集』（郷土研究社、なお本稿では岩波文庫版(1981)によった。）
1944：「樺太アイヌの生活」（未発表稿、なお本稿では『知里真志保著作集』3（1973、平凡社）によった。）
1953：『分類アイヌ語辞典・第一巻植物篇』（日本常民文化研究所、なお本稿では『知里真志保著作集』別刊1（1976、平凡社）によった。）
1959：「アイヌの鮭漁」『北方文化研究報告』14（北海道大学、なお本稿では『知里真志保著作集』3（1973、平凡社）によった。）
1962：『分類アイヌ語辞典・第二巻動物篇』（日本常民文化研究所、なお本稿では『知里真志保著作集』別刊1（1976、平凡社）によった。）
知里幸恵、1922：『アイヌ神謡集』（郷土研究社、なお本稿では岩波文庫版（1978）によった。）
苫小牧市博物館、1986：『常設展示資料目録』（苫小牧市博物館）
西本豊弘、1984：「動物質食料と環境」『歴史公論』103（雄山閣）
西脇対名夫、1991：「青竜刀形石器ノート」『北海道考古学』27（北海道考古学会）
萩中美枝、1979：「ユーカラにあらわれる神－鳥の神々」『昭和53年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（無形民俗文化財4）』（北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会）
Batchelor, John、1925：『アイヌ人とその説話』（富貴堂書房）
1927？：Ainu Life And Lore ; Echoes of a departing race, kyobunkwan.（なお本稿は、1971年Johnson Reprint Corporation復刻版によった。）
藤本英夫、1977：「サケを漁る太古の人々－サケ文化への序論」『消えた縄文人』（産報デラックス99の謎2-3）
藤村久和、1975：「霊について」『北海道開拓記念館研究報告2－民族調査報告書・総集編』（北海道開拓記念館）
Fitzhgh, William and Crowell, Aron、1988：Crossroads of Continents ; Cultures of Siberia and Alaska, Smithsonian Institution Press.
北海道開拓記念館、1972：『北方民族展資料目録』（北海道開拓記念館）
1981：『北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1・民俗1』（北海道開拓記念館）
北海道教育庁振興部文化課、1977：『昭和51年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（有形民俗文化財1）』（北海道教育庁振興部文化課編、北海道教育委員会）
北海道教育庁社会教育部文化課、1979：『昭和53年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（有形民俗文化財3）』（北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会）
1980：『昭和54年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（有形民俗文化財4）』（北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会）
1981：『昭和55年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（有

形民俗文化財５)』(北海道教育庁社会教育部文化課編、北海道教育委員会)
1986：『昭和60年度アイヌ民俗文化財調査報告書』(アイヌ民俗調査Ⅴ、北海道教育委員会)
北海道教育庁生涯学習部文化課、1990：『平成元年度アイヌ民俗文化財調査報告書』(アイヌ民俗調査Ⅸ、北海道教育委員会)
北海道先史学協会、1979：『江別太遺跡』(北海道先史学協会)
松井　章、1985：「「サケ・マス論」の評価と今後の展望」『考古学研究』31-4 (考古学研究会)
1994：「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物依存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ－北部地域南半部の調査』(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編)
松井章・山田格、1981：「北海道知内町湯の里遺跡－竪穴住居址出土魚類の検討」『考古学研究』28-3 (考古学研究会)
山田孝子、1994：『アイヌの世界観』(講談社)
山内清男、1964：「日本先史時代概説」『日本原始美術』Ⅰ (講談社)
1969：「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』Ⅰ (学習研究社)
四柳嘉章、1976：「『サケ・マス論』の基盤について」『考古学研究』23-2 (考古学研究会)
1978：「縄文時代漁撈活動の復元－網漁具とサケ・マス論補遺」『石川県立水産高校図書館紀要』Ⅰ (石川県立水産高校)
1983：「サケ・マス」『縄文文化の研究』2 (雄山閣)
渡辺　仁、1963：「アイヌのナワバリとしてのサケの産卵区域」『民族学ノート－岡正雄教授還暦記念論文集』(平凡社)
1977：「アイヌの生態系」『人類学講座』12 (雄山閣)
渡辺　誠、1967：「日本石器時代文化研究における『サケ・マス』論の問題」『古代文化』18-2 (古代学協会)
1970：「青森県類家貝塚における自然遺物の研究」『古代学』17-2
1973：『縄文時代の漁業』(雄山閣)

(国立歴史民俗博物館民俗研究部・助手)

写真5　事例2「なづち棒」(釧路市立博物館所蔵、釧路市立博物館 1989：68より転載)

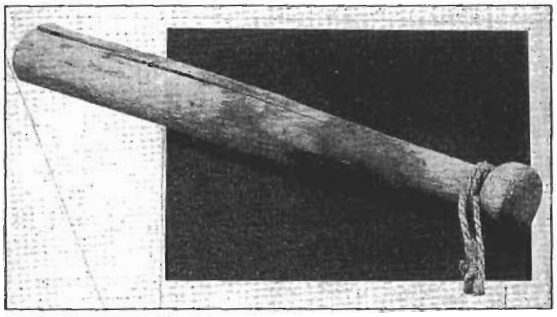


写真6　事例3「鮭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)」(市立旭川郷土博物館所蔵、北海道教育庁振興部文化課 1977：46より転載)

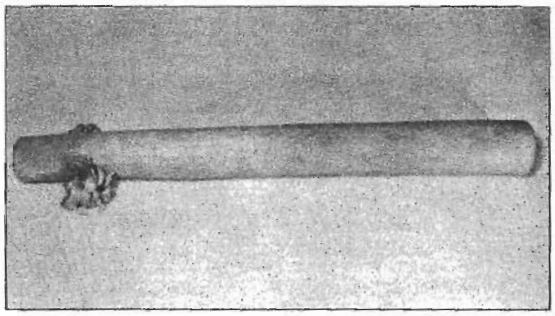


写真7　事例4「鮭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)」(市立旭川郷土博物館所蔵、北海道教育庁振興部文化課 1977：46より転載)

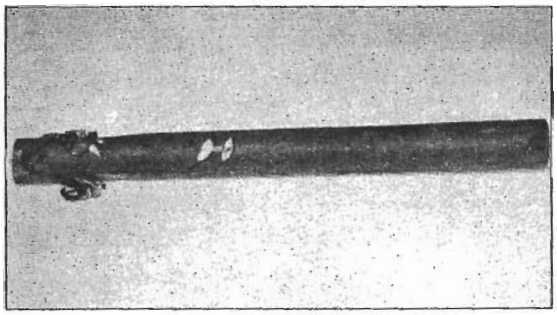


写真8　事例5「鮭の頭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)」(市立旭川郷土博物館所蔵、北海道教育庁振興部文化課 1977：46より転載)

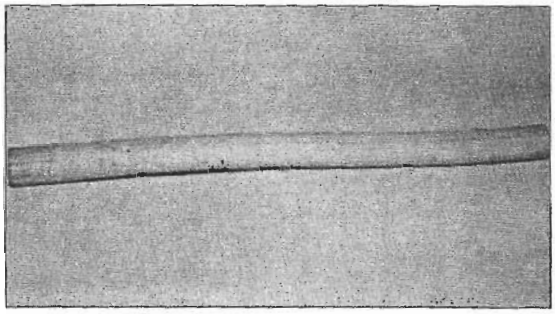


写真9　事例6「頭たたき棒（イサパキッニ、i-sapa-kik-ni)」(二風谷アイヌ文化資料館所蔵、北海道教育庁振興部文化課 1977：128より転載)

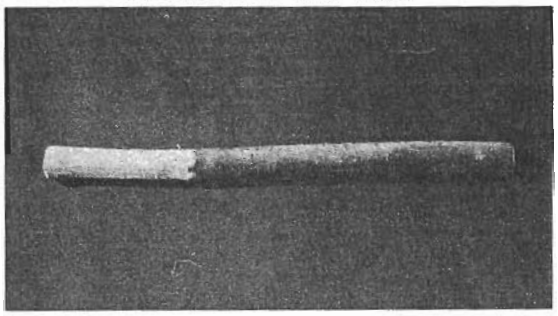


写真10　事例7「なづち棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)」(白老民俗資料館所蔵、北海道教育庁社会教育部文化課 1979：39より転載)

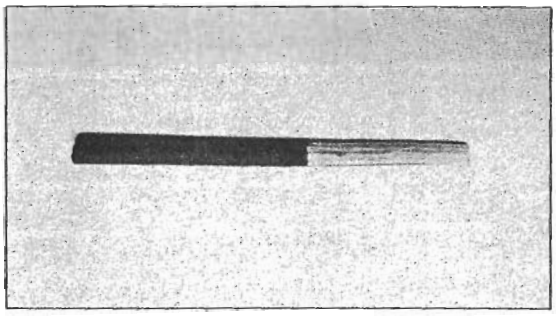


写真11　事例8「叩き棒(イサパキッニ、i-sapa-kik-ni)」(浦河町郷土博物館所蔵、北海道教育庁社会教育部文化課 1980：23より転載)

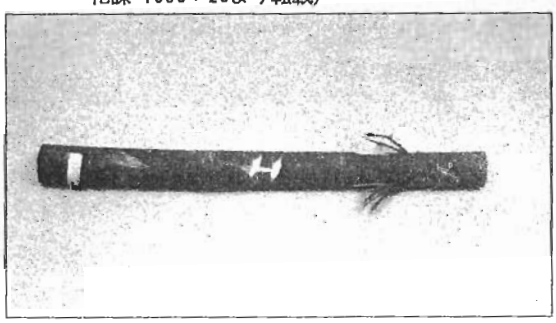


写真12　事例9「叩き棒(イサパキッニ、i-sapa-kik-ni)」(浦河町郷土博物館所蔵、北海道教育庁社会教育部文化課 1980：23より転載)

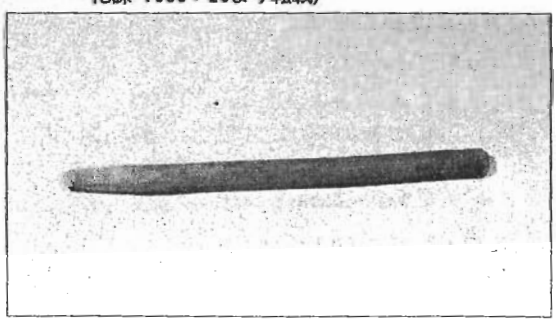


写真13　事例10「叩き棒(イサパキッニ、i-sapa-kik-ni)」(浦河町郷土博物館所蔵、北海道教育庁社会教育部文化課 1980：24より転載)

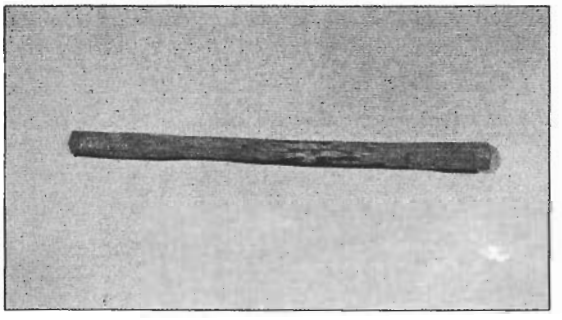


写真14　事例11「なづち棒(イサパキクラ、isapakikmi)」(苫小牧青少年センター所蔵、北海道教育庁社会教育部文化課1981：78より転載)

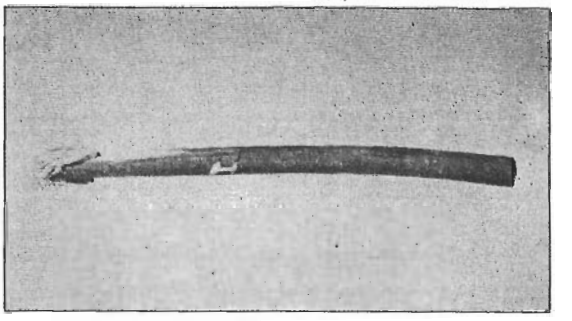


写真15　事例16「なずち棒(isapakikni)」(上)、事例17「なずち棒 (isapakikni)」(下) (河野本道氏所蔵、北海道開拓記念館 1972：50より転載)

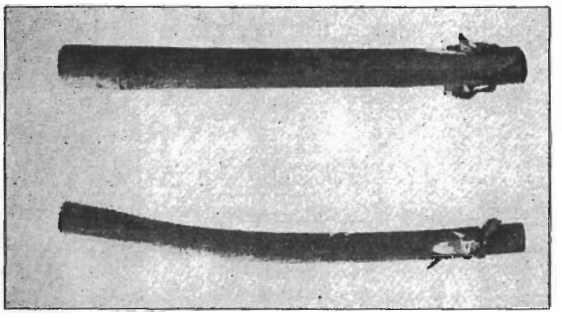


写真16　事例19「頭叩棒 (イサパキクニ)」(更科 1976：437より転載)

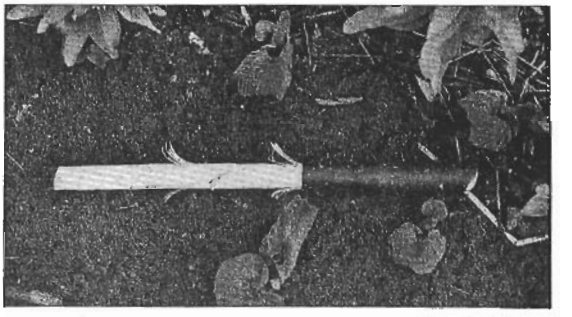
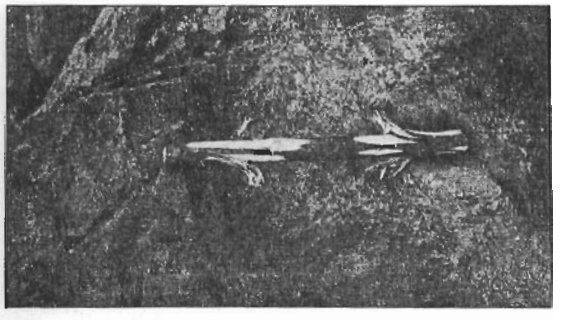


写真17　事例20「頭叩棒 (イサパキクニ)」(更科 1976：437より転載)



"Fishhead-striking-club"as a magical implements, and "Fishhead-striking" as a magic (The first volume :AINU in Japan)

Yutaka, Suga

In North Pacific Rim, the native peoples, the great bicontinental arc that circumscribes the nothern reaches of the Pacific Ocean, occupy one of the richest maritime environments (include river and lake) in the world. Its varied resourses include many species of fish. The sea and river exert a strong unifying influence on the cultures of the region.

Because the fish(especially "salmon") of the river and sea were life itself to the native peoples of the North Pacific Rim, customs and taboos arose to regulate the activities connected with fish and fishing. Because the salmon were, for the majority of the cultures of the region, the most important of all the fish, there were more beliefs and customs about salmon than about any other fish. These beliefs regulated the attitude of caring for the fish, and reverence for their role in life.

In North East Japan(Hokkaido), Ainu fisherman always had a thick club of willow or dogwood by his side, which was called "isappakikni(fishhead-striking-club)", and with this he killed his catch. He did so by knocking it on its head.Ainu believed that salmon liked being struck on the head and thus killed, and it would return later to be caught and killed again, but to be killed any salmon with a stone or rotten wood would disturb salmon's run(going up stream). So they decorated on the club elaborately, and handled it carefully. The carved design in it demonstrated that salmon had a ritual importance.

In this paper, the author examines basic form, design, and how to use of fishhead-striking-club, points out that fishhead-striking-club is a magical implements, and striking on salmon's head is a magical activity.